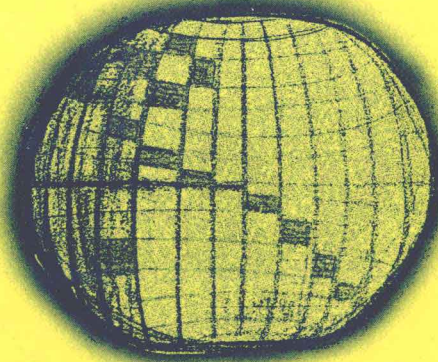


新経済学ライブラリー10

経済学史

三土修平 著



新 世 社

HISTORY OF ECONOMICS

新経済学ライブラリー10

経済学史

三土修平 著

新 世 社

著者紹介

三土 修平 (みつち しゅうへい)

1949年 東京都に生まれる

1972年 東京大学法学部卒業

現在 愛媛大学法文学部教授

主要著書

『基礎経済学』(日本評論社, 1984年)

『初歩からの経済数学』(日本評論社, 1991年)

『よみがえれ! 仏教』(世界聖典刊行協会, 1991年)

新経済学ライブラリ=10

経済学史

1993年 9月10日©

初版発行

1996年 4月25日

初版第3刷発行

著者 三土 修平

発行者 森平 勇三

印刷者 加藤 保幸

製本者 石毛 良治

【発行】

株式会社 新世社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷1丁目3番25号

☎(03)5474-8818代 サイエンスビル

【発売】

株式会社 サイエンス社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷1丁目3番25号

☎(03)5474-8500代 振替 00170-7-2387

印刷 加藤文明社

製本 石毛製本所

＜検印省略＞

本書の内容を無断で複写複製することは、著作者および出版社の権利を侵害することがありますので、その場合にはあらかじめ小社まで許諾をお求め下さい。

サイエンス社のホームページのご案内

<http://www.bekkoame.or.jp/~saiensu>

ご意見・ご要望は

saiensu@lib.bekkoame.or.jpまで。

ISBN4-915787-32-X

PRINTED IN JAPAN

編者のことば

経済学にも多くの分野があり、多数の大学で多くの講義が行われている。したがって、関連する教科書・参考書もすでに多くある。

しかし現存する教科書・参考書はそれぞれ範囲もレベルもまちまちばらばらであり、経済学の全体についてまとまったビジョンを得ることは必ずしも容易でない。

そこで何らかの統一的な観点と基準の下に、体系的な教科書・参考書のライブラリを刊行することは有意義であろう。

経済学を体系化する場合に、おそらく二つの方向がある。一つは方法を中心とする体系化であり、もう一つは対象分野、あるいは課題を中心とする体系化である。前者はいわゆるマルクス経済学、近代経済学、あるいはケインズ派、マネタリスト派などというような、経済学の特定の立場に立った体系ということになる可能性が大きい。このライブラリはそうではなく対象分野を中心とした、体系化をめざしている。それは経済学の既成の理論はいずれにしても、経済学において、というよりも現実の社会経済の問題すべてを扱うのには不十分だからであり、また絶えず変化する経済の実態を分析し、理解するには固定した理論体系では間に合わないからである。

そこでこのライブラリでは、学派を問わず、若い世代の研究者、学者に依頼して、今日的関心の下に、むやみに高度に「学問的」にするよりも、経済のいろいろな分野の問題を理解し、それを経済学的に分析する見方を明確にすることを目的とした教科書・参考書を計画した。学生やビジネスマンにとって、特別の予備知識なしで、経済のいろいろな問題を理解する手引として、また大学の各種の講義の教科書・参考書として有用なものになると思う。講義別、あるいは課題別であるから、体系といっても固定的なものではないし、全体の計画も確定していない。しかしこのライブラリ全体の中からおのずから「経済」という複雑怪奇なものの全貌が浮かび上がってくるであろうことを期待してよいと思う。

竹内 啓

まえがき

本書は、重商主義から現代までにいたる経済理論の歴史を学ぶための教科書である。経済学にとって、古典派より前の時代は、年代的にも長い期間にわたり、発掘すれば多くの貴重な文献も見つかるはずの時代ではあるが、なにぶんにも経済学という独立した学問が未確立で、知識の累積的進歩には乏しかった時代なので、本書では叙述を簡略化してある。また、ケインズより後の時代の理論は、まだ歴史の博物館には入らない現代の理論として、他の科目の中で言及されることが多いため、経済学の歴史を教える本書の性格上、叙述を簡略化してある。したがって、本書が特に力を入れて叙述しているのは、古典派経済学やマルクス経済学から新古典派経済学を経てケインズにいたるまでの範囲である。

わが国では、マルクスまでの理論史を「経済学史」という科目で教え、限界革命以後の理論史を別立ての「近代経済学史」という科目で教えている大学があるが、本書の守備範囲は、その場合の狭義の「経済学史」ではなく、「経済学史」と「近代経済学史」の全体である。

本書では、平均費用曲線と限界費用曲線の位置関係や、箱型図表によるバレート最適の図解などを、読者がすでに理解していることを前提にして叙述を進めている箇所が少しだけあるので（第3章、第7章、第9章）、できれば、経済原論とかミクロ経済学とかマクロ経済学とかいった科目を履修したあとで、それらの中に出てきた理論を成立史的に振り返ってみるという態度で読んでもらうのが望ましい。しかし、それらの理論を知らない学生であっても、多少の補足説明さえ受ければ、本書の理解にさほどの困難は感じないはずである。というのは、本書は、理論の歴史を述べる中で理論の内容その

ものをも説明するというスタイルをとっているからである。したがって、本書そのものを経済原論などの理論的科目の教科書として用いて、これによって学生に理論を身につけてもらうという利用法も、場合によっては可能であろう。

本書の執筆にあたっては、経済学史の全体をできるだけ公平に扱うよう努力したが、著者の研究者としてのスタンスゆえに、強調点の置き方が類書とやや異なっているのは事実である。そこで、本書を教科書に用いる講義担当者のために、筆者のスタンスゆえの本書の特徴点というべきものを箇条書きにして、参考以供することにしよう。

- (1) 従来の「経済学史」と「近代経済学史」との分業体制のもとでは、「経済学史」ではリカードの価値分解説の正しさが強調され、「近代経済学史」では限界革命による価値論の革新の意義が強調されて、学習者の頭に解きたい混乱を与えることが多かったが、本書では、価値分解説のその時代なりの相対的な正しさを強調すると同時に、それを絶対化しないことで、解決を図っている。
- (2) 本書では、資本理論を一般均衡理論の発展の一環として位置づけ、ワルラスとバウム＝バヴェルクなど、従来、統一的にながめられることの少なかった学説を、フィッシャーとの関係で統一的にながめるようにしている。
- (3) ヒックスの主たる貢献を、序数的効用や代替財・補完財の定式化など、効用理論の精緻化の面に見いだし、ワルラス→パレート→ヒックスという流れで一般均衡理論の発展をみようとする人が多いが、著者はむしろ、均衡概念の発展を「所与のストックのもとでの、将来予想を含まない均衡」→「斉一成長状態の均衡」→「異時点間一般均衡」→「一時的な一般均衡」という流れでとらえ、ヒックスの主たる貢献はこの最後の均衡概念を明示した点にあると考えている。したがって、人物的にはワルラス→フィッシャー→ヒックスという流れを重視している。

なお、各章末の練習問題は、習った知識を再確認するための問題だけでな

く、本文の知識をもとにして応用的に考えさせる問題を多く入れておいたの
で、レポートの課題などにも活用していただけるものと思う。

本書の執筆の依頼を最初に新世社のスタッフの方から頂戴して以来、実に
5年の歳月が経過してしまった。いったん引き受けてはみたものの、経済学
の歴史全体についてひとつの見識にもとづいた展望を示すということは並た
いていのことではないと気づき、一度は辞退を申し出たほどであったが、私
をご指名下さった竹内啓先生と新世社スタッフの方々の寛容と忍耐に支えら
れて、ようやく気を取り直し、こうして脱稿に漕ぎ着けることができた。

本書執筆のために準備をする過程で、歴史上の著名な経済学者の学説をあ
らためて深く学ぶことができたのは、私自身にとっても大きな収穫であった。
もともと、大学で直接には経済学史の授業を担当していない私が、経済学史
の教科書執筆という大任を仰せつかったのは、雑誌に経済学史についての放
談を連載していたのが竹内先生のお目にとまったことを機縁としているが、
古典派から新古典派にいたる学史をふまえて物をいうという私の基本的な姿
勢は、神戸大学大学院で恩師・置塩信雄先生の感化によって培われたもので
ある。古典派しか知らないとか、新古典派にしか興味をもたないとかいった
学者の多いわが国の風土の中で、置塩先生はつねに、古典派経済学、マルク
ス経済学、新古典派経済学、ケインズ派経済学の4つの学派の学説をすべて
ふまえて発言され、しかもいわゆる「経済学学者」ではなくて「経済学者」
であられるという希有な方である。その視野の広さをわがものとするとは、
われわれ門下生にとっては永遠の課題である。

思い起こせば、1976年の春、私が神戸大学で経済学を勉強しなおすため
に経済企画庁を辞職したいと申し出たとき、強く引き留めて下さったのは、
当時の総合計画局長・宮崎勇氏であった。「官庁にいながらでも経済学は勉
強できるのではないか」とのご意見であった。それに対して私は「実務に役
立つだけの経済学ではなく、学説史の全体をきちんとふまえた経済学を学び
たい」と、たいそう大風呂敷なことを申し上げてしまったのだが、本書の執

筆によって、そのときのお約束の何分の一かをようやく果たすことができた
思いである。

なお、本書の第2章にある「ケネーの経済表でどの部門に付加価値が生じるかは価格の付け方しだいで変わる」という命題は、鷺田豊明氏（和歌山大学）のご示唆によって気づいたものである。また、経済学において言葉の定義をめぐる不毛な争いがしばしば生じた事実については柳沢哲哉氏（東北大学）から、一般均衡理論の世界各国への普及の過程については池尾愛子氏（國學院大学）から、それぞれ有益なご示唆をいただいた。愛媛大学の同僚である赤間道夫氏からは、マルクス経済学の立場からの学史のとらえ方についてご教示いただくと同時に、資料面でも相談に乗っていただいた。

新世社の小関清氏および高橋耕氏には、本書の完成に向けての裏方としてご尽力をたまわり、たいへんお世話になった。記してお礼の言葉に代えさせていただきます。

1993年5月

三土修平

目 次

1 経済学史を学ぶにあたって

1

1. 1	なぜ経済学史を学ぶか	2
1. 2	経済学史の概説	9
1. 3	技術的予備知識	17
	参考文献	30
	練習問題	31

2 古典派以前の経済学

33

2. 1	重商主義	34
2. 2	重農主義	40
	参考文献	51
	練習問題	52

3 スミスの経済学

53

3. 1	富と価値の理論	54
3. 2	資本蓄積と生産的労働	65
3. 3	見えざる手のはたらき	72
3. 4	後世への影響	76
	参考文献	79
	練習問題	80

4 リカードの経済学

81

4.1 価値論と賃金論	82
4.2 差額地代論と蓄積論	91
4.3 比較生産費説	94
4.4 ミルによる継承と修正	98
参考文献	106
練習問題	107

5 マルクスの経済学

109

5.1 労働価値説と搾取説	110
5.2 価値を生む労働	121
5.3 蓄積論と利潤率低下法則	123
5.4 マルクス経済学の光と影	126
参考文献	133
練習問題	134

6 限界革命

137

6.1 限界革命の人物像	138
6.2 価値論の革新	147
6.3 費用の理論	154
参考文献	161
練習問題	163

7 一般均衡理論	165
7.1 純粹交換經濟	166
7.2 生産の理論と限界生産力説	174
7.3 「最大満足」をめぐる問題	181
7.4 資本理論における不備	187
参考文献	189
練習問題	190
8 資本理論の発展	193
8.1 ベーム=バヴェルクの資本理論	194
8.2 シュンペーターとハイエク	205
8.3 フィッシャーの資本理論	212
参考文献	219
練習問題	221
9 マーシャルの経済学	223
9.1 経済学の方法	224
9.2 期間概念の明確化	228
9.3 有機的成長の理論	234
9.4 収穫逓増と独占的競争	238
9.5 ピグーの厚生経済学	242
9.6 新古典派経済学のとめ	246
参考文献	249
練習問題	250

10 数理経済学とその周辺	253
10.1 一般均衡理論の発展	254
10.2 計画化の経済学	266
参考文献	273
練習問題	275
11 ケインズの経済学	277
11.1 貨幣理論の歴史	278
11.2 ケインズ体系	283
11.3 均衡か不均衡か	293
参考文献	301
練習問題	303
12 ケインズ以後の経済学	305
12.1 景気循環論と経済成長論	306
12.2 リカード経済学の復興	311
12.3 反ケインズ派経済学の復興	319
12.4 経済学史のいろいろな見方	325
参考文献	328
練習問題	330
あとがき	333
索引	337

1

経済学史を学ぶにあたって

経済学は社会現象を対象とする実証科学であり、古典研究を主眼とする学問ではない。しかし、対象である社会現象自体が時代とともに変化するため、この学問の発達過程は、一定不変の研究対象について人間側の知識が日々に増進してゆくという単純なかたちにはならない。いったん忘れ去られた理論が時代環境の変化にともなってふたたび注目されることも多く、その発展経路は螺旋的である。また、経済学の専門用語は、社会生活から生まれた語彙を当の社会生活の分析のために用いるという事情のため、社会の変化につれてその定義も変化する場合が多い。こうした理由により、経済学を学ぶさいには、現代の最新の理論を学ぶだけでなく、過去の時代に生まれた多様な学説を、それを生み出した時代背景と照らし合わせながら理解することが重要な課題となる。

1.1 なぜ経済学史を学ぶか

■ 古典研究から実証科学へ

1960年代ごろまでのわが国では、経済学といえば、昔の偉い経済学者の学説を一生かかって研究する学問だという受け止め方が、かなり広くはびこっていた。その名残で、現在でも私も経済学者が「経済学を専攻しています」と自己紹介すると、すぐさま「マルクスをやっていますか、それともケインズをやっていますか」と問い返してくる人がある。文学部の先生がシェイクスピアを専攻したりゲーテを専攻したりするのと同じような意味で、経済学者も「私はマルクスをやる」、「私はケインズをやる」というふうに専攻する研究対象を決めて古典研究をしているのだと思い込んでいるのだ。

このいささか奇異な風潮は、経済学が輸入学問としてはじまったというわが国の特殊事情によるもので、しだいに解消に向かいつつあるようだ。経済学もひとつの実証科学であって、実証によって確かめられた仮説は残り、否定された仮説は捨てられるというかたちで、日々発展してゆく、というあたりまえのことが、ようやくわが国でも一般の人に認識されるようになってきたのだ。

およそひとつの学問が実証科学として確立されたならば、それ以後は、その最新の研究成果を身につけ、自分自身の新たな知見を付け加えてゆく営みこそが、学問的営みの主要内容をなす。たとえば、物理学の世界では、力学を学ぶためにニュートン (Isaac Newton, 1642-1727) の著作を直接学ぼうという人は、よほどの物好き以外にはいない。ニュートンの研究成果を後世のずっと洗練された叙述方法でコンパクトにまとめ、さらにその後の豊富な研究成果を付け加えて書かれている現代の力学教科書を勉強すれば、ずっと能率的に力学の体系を身につけることができるからだ。経済学も、最近はいよいよその種の学問になりつつあり、古典の研究は一部の物好きのものとなりつつある。

このような時代にあってもなお、経済理論とは区別して、わざわざ「経済学史」を講ずるからには、なぜそのような科目を学ぶことが必要なのかを、きちんと説明しておく必要があるだろう。

■ 諸学説の同時並行的存在

経済学は、社会を対象とする社会科学の一分野である。自然科学の場合には、宇宙の進化や生物の進化を対象とするごくかぎられた部門を除けば、時間がたっても変わらない一定不変の法則を探究するのが学問の使命である。それにひきかえ社会科学の場合には、研究対象となる人間社会自体が、時代がたつにつれて変化する。そのため、社会科学の発達過程は、一定不変の研究対象について人間側の知識が日々増進してゆくという単純な知識獲得過程としてはとらえられない複雑なものとなる。

社会科学上の新しい理論というのは、現象そのものがその時代になってはじめて起こるようになった現象であるため、それを説明する理論もその時代になってはじめてつくられた、というものが多い。理論の新しさがかならずしも知的水準の上昇を意味しないのだ。と同時に、時代の推移によって、ある理論が対象としていたような現象が起これにくくなると、その理論がかならずしも全面的に誤りではないにもかかわらず、あたかも理論的に棄却されたかのようなかたちで、退場を余儀なくされることもある。そのようにして退場させられた理論は、時代の状況が変わるとふたたび注目されて、装いを新たにして表舞台に再登場することもある。

経済学の場合の一例をあげると、「物価水準は流通する貨幣の量によって決まる」とする貨幣数量説は、1930年代に、不況を救済するためならば少々人為的に貨幣量を増やしても物価は上がらないということが認識された時代状況の中で、その認識を理論化したケインズの経済学によって論破されたかたちで退場したが、1970年代に、不況のまま物価が上がるスタグフレーションという現象が顕著になるにつれて、マネタリズムという理論の中に組み込まれて再登場することになった。

このように、経済学の理論というものは、古くてまちがった理論から新しく正しい理論へという単線的発展の筋道をたどるのではなく、多面的な現実のうち、あるひとつの側面に着目して立てられた複数の理論が、同時並行的に伏流水のように存在し、時代の状況に応じて伏流水のうちのひとつかふたつが地表に出てくる、といったかたちで発展してゆく傾向がある。

むろん、時代とともに歴史的観測結果も蓄積されるし、数学その他、理論展開を助ける道具も整備されてゆくから、時代を隔てて同種の理論が注目されるといっても、学説が完全に円をえがいて元の場所に戻ってくるのではなく、いわば螺旋的に、上昇しながら元に近い位置に戻ってくるということになる。が、いずれにしても、単純な上昇運動ではないわけだ。

このような筋道をたどって発展してきた経済学という学問を学ぶにあたっては、現在地表に出ている流れだけではなく、今後とも地表に出てくる可能性のある伏流水としてどんなものがあるかを学んでおくことが、たいへん有益であろう。その知識が経済現象をとらえるにあたっての自分の視野を広くしてくれるし、新しい理論を生むためのインスピレーションの源にもなってくれるだろうからである。

■ 相対主義と絶対主義

上にあきらかにしたように、社会科学の一分野である経済学という学問は、学説の歴史そのものが、対象たる社会の歴史と不可分のかたちで存在してきた。そして、社会の歴史というものは、厳密に言えば一回かぎりの現象の積み重なりであり、同じことの繰り返しというのではない。そこで、経済学の歴史をとらえるさいのひとつの極端な立場として、それぞれの学説を一回かぎりの時代思潮としてとらえようという立場が成り立ちうる。この立場によれば、たとえば19世紀初頭のイギリスでとなえられた比較生産費説という貿易理論は、当時のイギリス資本主義の利害を反映した思想であり、1870年代に西ヨーロッパ各国でとなえられはじめた効用を重視する経済理論は、独占資本の成立と関連する思想だということになる。内容が正しいか否かで批

評するのではなく、もっぱら、どういう社会状況の反映かという観点から学説を説明するのである。こういう立場は**相対主義**とよばれる。これに対して、学説の歴史を誤った学説から正しい学説への発展という観点からだけとらえようとする立場は**絶対主義**と名づけることができよう。

相対主義には多くのもっともな点がある。しかし、完全にこの立場に立ってしまったのでは、知識の累積的進歩ということを認めないことになり、思想史を叙述したことにはなっても、経済学史を叙述したことにはならないであろう。そして、現に経済学が実証科学として発展しつつあるという事実をも無視することになってしまう。

経済学には実証科学としての側面があり、仮説の検証というかたちで、知識が不確かなものから確かなものへと日々改善されてゆく進歩の過程があるということは、こんにち、なんびとも否定できない。要は、経済学には別の側面もあるということを忘れさえなければよいのだ。

■ 言葉の問題の重要性

実証的な社会科学というのは、自然科学と同様、「AはBである」とか「AはCでない」とかいった命題を立てて、その真偽を、データによって検証したり、論理的に論証したりするものである。ところで、命題の真偽がきちんと判別できるためには、その中に出てくるAとかBとかCとかいった概念が、あらかじめきちんと定義され、一定不変の内容をもっているものでなければ話にならない。

自然科学の場合、このような方法の適用にあたって、ほとんど問題は起こらない。物理学の場合でいえば、「力」、「運動量」、「仕事」、「エネルギー」などの語には、いずれも学術用語としての明確な定義が与えられており、これらの語が日常生活の上でもつあいまいさが、学問の中には入り込まないように、きちんと防壁が立てられている。

社会科学である経済学の場合、この点がいささか問題なのだ。

経済学が伝統的に用いている「収入」とか「資本」とかの語は、もともと